



人間文化研究機構地域研究推進事業
「現代インド地域研究」

RINDAS

The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University

龍谷大学現代インド研究センター

RINDAS 伝統思想シリーズ 8

ブラフマニズム社会の再編

—理念社会の形成と多様社会への対応・共生から統合のための装置—

渡瀬 信之



龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター・現代インド研究センター The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University

研究テーマ：「現代政治に生きるインド思想の伝統」

The Living Tradition of Indian Philosophy in Contemporary India



現代インドのイメージは、かつての「停滞と貧困のインド」、「悠久のインド」から、「発展するインド」へと様変わりした。激変する経済状況を支えたのは、相対的に安定したインドの「民主主義」政治である。興味深いことに、現代政治・経済を支える人々の行動規範や道徳観の根底には、「民主主義」などと並んで、サティヤ（真実／真理）、ダルマ（道徳性／義務）、アヒンサー（非暴力）など、長い歴史に培われてきたインドの思想やその世界観が横たわっている。

本プロジェクトでは、龍谷大学が創立以来370年に渡って蓄積してきた仏教を中心としたインド思想研究に関する知識と史資料を活かし、近年本学において活発化している現代インド研究を結合させる。「現代政治に生きるインド思想の伝統」というテーマにもとづき、下記のように二つの研究ユニットを設けて現代インド地域研究を推進し、プロジェクト活動を通じて、次世代を担う若手研究者の育成を図っていく。

研究ユニット1「現代インドの政治経済と思想」

研究ユニット2「現代インドの社会運動における越境」

RINDAS 伝統思想シリーズ 8

ブラフマニズム社会の再編

——理念社会の形成と多様社会への対応・共生から統合のための装置——

渡 瀬 信 之

ブラフマニズム社会の再編

——理念社会の形成と多様社会への対応・共生から統合のための装置——

渡 瀬 信 之

まえがき

ヴェーダと家そして祭式を中心に形成されてきたブラフマニズム世界はおよそ紀元前6世紀前後頃禁欲出家主義の台頭によって脅かされ、伝統社会の再編を迫られる。この事業を主導したのはヴェーダーンガの一ジャンルから脱皮し、主としてブラーフマナの行動全般の準則を整備することを目的としたダルマスートラであった。ダルマスートラは社会の再編に際して第一としたのは、あるべき社会を理念化することであった。そしてこの理念化はその後紀元前後の編纂とされるマヌスクリティによって完成する。

ダルマスートラが採った再編の根本理念は、新生ブラフマニズム社会は、ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラの4ヴァルナによって構成され、かつそれぞれのヴァルナはそれぞれに固有の社会機能・正業を有し、相互に不可侵であるというものであった。

しかしこの理念化は必然的にそれとは必ずしも相いれない多様な現実社会との間に二重構造社会を出現させた。結果として、再編事業はこの二重社会にどのように対応するかを迫られた。ダルマスートラは、理念と異なるものを無視あるいは力によって組み伏せる策は採らなかった。彼らは理念化を推進する仕組み強化する一方において、理念と異なる多様な現実に対して柔軟姿勢を採り、それらと共生しつつ統合化する装置を考案した。

本稿においては、ブラフマニズム社会の再編理念と現実との間のギャップにダルマスートラはいかに取り組もうとしたかを見ていく。

1. 時代背景

—禁欲出家主義の台頭＝二つの価値の対立—

紀元前6世紀前後頃、禁欲出家主義が台頭し、それまでのヴェーダとそれに基づく祭式を中心とする社会にとっての大きな脅威となった。禁欲出家主義は、結婚して家庭を築き、子孫を残し祭式儀礼を初めとする社会的義務を果たすというそれまでの伝統的なブラフマニズムの価値観を根底から否定するものであり、彼らの思想と生き方が勢力を得ることは、正統ブラフマニズムの社会秩序を根底から崩壊させることを意味した¹。

彼らが子孫を得るという価値観を否定したことは次のブリハッドアーラニヤカウパニシャッド(4.4.22)に見られる。

「ブラーフマナはヴェーダの復唱により、祭祀により、布施により、苦行によりまた断食により、そのもの（アートマン）を知りたいと願う。まさしくそのものを知ったとき彼はムニとなる。遍歴者たちはそのものをこそ彼らの世界として求めて遍歴する。古人は実にこのことを知っていたがために「我々にとってこのアートマンがこの世界であるのだから、子孫が一体なんの役に立とう」と

いって、子孫を望まなかった。彼らは子孫に対する熱望、そして世間に対する熱望から超脱して乞食して歩き回る。」

一方、ダルマストラは「家」の永続こそは最も重大な課題であることを強調する。パウダーヤナは、供儀を行わず、婚姻を結ばず、ヴェーダを無視しブラーフマナを無視する家は家でなくなると言い(1.10.26)、ヴァシシュタもまた家の滅亡は一切の滅亡に他ならないことを警告する(1.26-27;1.38)。

こうして伝統世界の再編が要請されたわけであるが、これを担ったのは、上述したようにダルマストラの担い手たちであった。ダルマストラはヴェーダーンガの一つであるカルパストラの一支配として祭式の担い手であるブラーフマナの行動の準則を整備することを主たる任務としたが、徐々に祭式から独立し、ブラーフマナと王を中心としつつあるべき生き方、行動の準則全体を整備する動きを取っていた。

このようなダルマストラに、禁欲出家主義の台頭によって求められたのは、次の三つであった。すなわち、基本的価値観としてヴェーダをベースとし、家を主体とする伝統的価値の復権・確立を図りそして社会体制の再編と整備を行うことであった。これを人々の行動の準則を規定するということを通じて実行した。

2. ブラフマニズム社会の再編

—ダルマストラはどのような社会を作ろうとしたか—

1) 上位3ヴァルナを主体とする4ヴァルナ体制

ダルマストラはブラーフマナを筆頭としてクシャトリヤ、ヴァイシャの3ヴァルナを核とし、これにシュードラを加えた4ヴァルナ体制を志向する。この体制は、創造主は4ヴァルナをそれぞれに特有の社会機能・正業を付して創造したという根本理念に基づいている。

この理念は、原人プルシャから宇宙が展開する際に4ヴァルナが創造されたとするリグヴェーダのプルシャスークタ(RV90.12)に端を発し、その後それに連なる一連のヴェーダ文献において繰り返される²。この思想をダルマストラは継承しより社会的な理念として発展させた。すなわち、創造主ブラフマンは、4ヴァルナを創造するだけでなく、各ヴァルナにそれぞれに特有の社会機能・正業を付して創造したとする理念を作り上げた³。

これによって、4ヴァルナのみが神意に基づく正統的な存在であり、神意によって与えられた社会的役割を担って社会を維持することを使命づけられているという基本理念が作られたのである。

2) ダルマを秩序原理として採用

そしてもうひとつ決定的に重要な理念は、リグヴェーダ以来継承されてきていたダルマを社会秩序原理として採用するというものであった。これは創造主ブラフマンは、それぞれに特有の社会機能・正業を付して創造したとされる理念とセットにされ、この理念を具体化、補強・強化するものであった。

リグヴェーダにおいてダルマは、太陽を初めとする大自然界の構成要素を宇宙の中に秩序づける原理とみなされた。ダルマストラの担い手たちにとって、人間社会も宇宙秩序の中に在るものであり、そうである以上は、人間社会もまた同じくダルマによって秩序立てられるべきものであった。このことはリグヴェーダにおけるダルマ観がそのまま再編ブラフマニズム社会の秩序原理として採用されたことから知られる。

以下において、リグヴェーダにおけるダルマ観念を示すが、そこでは、宇宙秩序リタから発せられるダルマは太陽を初めとする大自然を構成する要素が神格化された神々に配分され、大自然界の秩序の中における神々の特有のポジションと役割を決定する原理であると同時に、相互に不可侵であるという観念が注目されよう。この観念がブラフマニズム社会の再編に決定的な役割を果たすことになる。

(1) ダルマとは何か

ダルマの観念は、ブラフマニズムの最初期を飾るリグヴェーダに端を発する。そこにおいては、ダルマは、主としてサヴィトリ、スールヤ、ウシャス、ミトラ（あるいはヴァルナ）のような大自然の構成要素あるいは自然現象が神格化された神々と強く係わる。そしてダルマは以下の観念を有していた。

①ダルマ＝神々の大自然界における特有のポジション・特有の行動様式を決定している原理

ヴェーダの詩人達は、太陽を初めとする神格が大自然あるいは大宇宙の秩序の中でそれぞれに特有のポジションを有し、特有の機能と行動様式を見せることに強く心打たれたように思われる。そしてそのことは、神々がダルマに従う結果であるとみなされた。

・清浄なる神、太陽が天地両界の間の空界を進むのはダルマに従ってである（RV1.160.1）

ダルマは神々の特有の行動様式・機能を決定する根源的な原理であり、神々をしてそうした行動を起こさせる潜勢力であると考えられている。

②ダルマ＝神々の属性を決定している原理

- ・ソーマ・パヴァーマーナがざわめきの声を発するのは〔彼に〕配分された特有のダルマに従ってである（RV9.64.9）
- ・インドラが激烈であるのはダルマに従ってである（RV10.44.1）
- ・ソーマがこの一切のものに染みとおって清まるのもダルマに従ってに他ならない（RV9.86.5）
- ・アグニの炎が多彩であるのもアグニのダルマに従ってである（RV10.20.2）

ダルマは神々の特有の行動様式・機能を決定しているだけではない。それは同時に、神々の固有の本性・特性をも決定している。

③ダルマ＝不可侵

“satyadharman”（そのダルマが真実なる者、必ず成就する者）の用語が示すように、ダルマは真実なものであり、必ず実現されるもの、決して破られない不可侵なものであるとみなされている

以上のように、ダルマは、神々の特有の行動様式・機能及び特性を決定し、宇宙秩序の中における神々の位置を決定している根源的な原理ないしは潜勢力であり、かつそれは不可侵である。

(2) ダルマの源泉

それでは、このようなダルマの源泉は何であろうか。そして、ダルマの真実性・不可侵性は何に由来するのであろうか。

①これらの点で先ず注目されるのは、神々に冠せられる「宇宙秩序より生じる者」(ṛtajāta)、「宇宙秩序に忠実な者」(ṛtadhīti)、「宇宙秩序を繁栄させる者」(ṛtavṛdh)等の称号である。これらの称号は、神々はこの宇宙の最高の存在ではなく、それはリタ(ṛta)すなわち宇宙秩序そのものであることを伝える。神々はこの秩序に従って生まれ、この秩序に忠実であると共に、それを守り、繁栄を図るものとして存在する。神々は宇宙秩序が実現されるための媒介者に他ならない。

かくして、神々の行動・機能・属性を決定するダルマの源泉は宇宙秩序そのものと考えてさしつかえない。すなわち、ダルマは宇宙秩序に従って、宇宙秩序が実現されるべく神々に配分されているのである。

②ヴィシュヴェー・デーヴァースは「宇宙秩序に忠実な者達よ。そのダルマが必ず実現される者達よ。」(RV 5.51.2)と呼びかけられるが、この並列される二つの呼掛けの中に、宇宙秩序が神々に配分されたダルマを介して、神々を通して実現される関係が如実に語られているのを見るであろう。

③神々の行動・機能は直接にはダルマに従って発現するにせよ、究極的には宇宙秩序に従う結果であることは、よりはっきりと、神々は「宇宙秩序のダルマ」(ṛtasya dharman)に従うという表現の中に現れる。

・ウシヤスが日々決まった場所に姿を現すのは、彼女が宇宙秩序のダルマを破らないからである(RV1.123.9)

・神ソーマは宇宙秩序のダルマに従って不死なる飲物を創造した(RV9.110.4)

④宇宙秩序リタはダルマに同化し、ダルマもまた宇宙秩序リタと同化する。次の場合、リタの語の代わりにダルマの語を置き換えて支障はない。

・河川はヴァルナのリタに従って流れ(RV2.28.4)

・天地両神はミトラのリタを促進し、守護する(RV4.56.7)

ここでダルマは宇宙秩序そのものであると言ってよい。ダルマの真実性と不可侵性は正しくこのことに由来する。

(3) スヴァダルマ (svadharma)

このような根源的なダルマは、神々に配分されて特定の神と結合し、その結果としてその神に特有の機能・行動となって顕現する。すなわち神々は自らに配分されたダルマを自らのダルマとするのである。このことは「スヴァダルマ(自らのダルマ)」あるいは「・・・のダルマ」という用語によって明言される。

・神サヴィトリは天と大地の空間を満たし、自らのダルマに従って賛歌を作る。その賛歌とは、両手を伸ばして指令を発し、夜に世界を眠らせ、朝に目覚めさせることに他ならない(RV4.53.3)

本稿の冒頭において、ブラフマニズム社会の再編成は、4 ヴァルナはそれぞれに固有の社会機能、正業を有しており、相互に不可侵とされることを基本理念としてなされたことを述べた。これが上に述べ

てきたリグヴェーダ以来のダルマ観念に依拠したものであることは明らかである。

3. ブラフマニズム社会の再編 ―二重構造社会の出現―

ダルマースートラはリグヴェーダ以来のダルマ観念を新生ブラフマニズム社会再編の理念として採用した。すなわち、社会は4ヴァルナが唯一神意に基づく正当な人間集団であり、それぞれは神意に基づく固有の社会機能・正業（スヴァダルマ）を有し相互に不可侵であることを秩序原理とした。そして下記に表示したように、この根本理念を支える他の理念が合わさってブラフマニズム社会の再編が進められた。

しかしこの理念化によって、現実の問題として、実際社会との間にギャップを生みだし、結果として二重構造社会を出現させることとなった。それを整理すると表1のようになる。

表1. 理念社会と現実社会の二重構造

再編ブラフマニズム社会（理念社会）	理念世界の枠外（現実の社会）
創造主は4ヴァルナのみ創造した	4ヴァルナ以外の多様な集団の存在
創造主は身分特有の社会機能・正業（スヴァダルマ）を定めた	理念化された正業以外の職業に従事する者たちの存在
同一ヴァルナ同士の結婚	異なる身分間結婚の存在
家住主義	出家・禁欲者たちの存在
ブラフマニズム世界は浄の場	罪・不浄の存在
行為規範（ダルマ）の制定	多様な慣習

4. 理念と異なる現実に対してどのように対応しようとしたか

―理念の推進そして異なるものとの共生・統合の装置の構築―

あるべき再編社会は上述してきたように理念に基づく社会であったため、現実には、実際社会との間に二重構造社会を現出させることとなったが、ダルマースートラの意図は理念社会の推進であることは言うまでもない。しかしそのことは決して理念に違背する諸現実を無視ないしは力でねじ伏せるものではなかった。ダルマースートラの採った基本方針は、推進のための仕組みを作ると同時に、異なるものに対して柔軟に臨み、それらと共生しつつ統合していく装置を構築することであった。このことは、社会の理念化とセットの再編事業の二本柱であったことを強調しておきたい。以下において、その装置を見ていくことにしたい。

1) 4ヴァルナ以外の人間集団の存在に対してどのように対応したか

課題は二つである。ひとつは4ヴァルナ以外の集団の存在理由を説明すること、そして他のひとつはそれら集団を身分社会の中に位置づけることである。

(1) 4 ヴァルナ以外の集団の存在をどのように説明したか ―混血婚理論―

創造主は4 ヴァルナに限って創造したというのが理念であるが、実際には多様な人間集団の存在があった。ダルマーストラには歴史的によく知られた様々の集団が記される。たとえば、スータ、マガダ、ヴァイデーハカ、ニシャダ、パーラシャヴァ等々である。こうした4 ヴァルナに属さない集団の存在理由を説明するのは極めて実的な課題であった。このために用意されたのがいわゆる混血婚理論とその装置である。

本来、婚姻は創造主が4 ヴァルナに限って創造した以上、同一ヴァルナ間でのみ許されるべきものであり、神意に違背する結果を生み出すヴァルナ間の混血婚はあってはならないものであった⁴。ダルマーストラは神意に違背してなされた混血婚を4 ヴァルナ以外の集団の誕生の説明として取り入れた。

混血婚理論によれば、4 ヴァルナ以外の人間集団の誕生は4 ヴァルナ間の混血婚に端を発し、その後様々の集団間で次々と混血婚が繰り返されることにより多様な集団が誕生していったとされる⁵。この理論の妙は、第一に、混血婚の組合せはほとんど無限であり、理論的には如何なる集団であれその誕生を説明できることであり、そしていま一つは、この理論を適用すれば如何なる集団であれ、祖先を辿れば4 ヴァルナに繋がることになり、創造主は4 ヴァルナしか創造しないという理念と矛盾しないことである。イメージとして図示すれば図1のようになる。

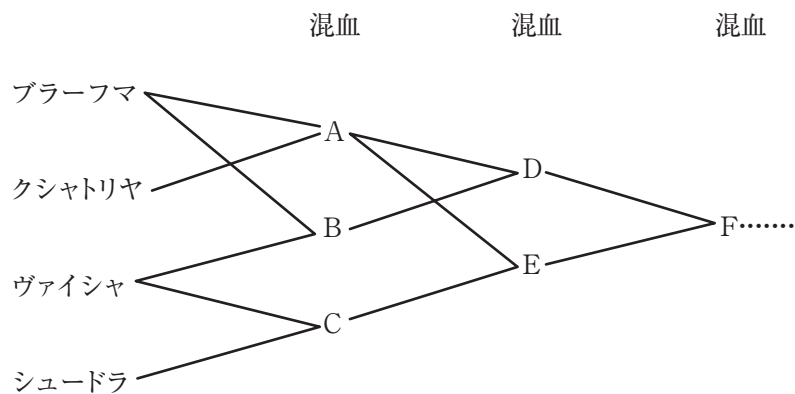


図1. 混血婚理論のイメージ

(2) 社会的ポジションをどのようにして与えたか

再編社会はプラフマを頂点とし、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラと続く身分制を社会秩序とする。そうである以上は、4 ヴァルナ以外の集団もまた序列化されねばならない。混血婚理論はここでも用いられた。序列化に際して混血婚集団はまず大きくは二種に分類された。男子上位・女子下位の組合せの混血婚によって生まれた集団（アヌローマ婚集団）と、男子下位・女子上位の組合せによる混血婚によって生まれた集団（プラティローマ婚集団）である。そして前者は社会的に容認され、⁶ 後者は徹底的に排除された。こうしてまず第一に混血婚集団はこのいずれかに仕分けされ、社会的ポジションを与えられた。

次に、それぞれのジャンルの中での上下を決めることである。アヌローマ婚においては、男女共により上位集団である方が、より上位に位置づけられ、プラティローマ婚においては、男子がより低く女子がより上位の集団に属するほどより下位に位置づけられた。

以下は社会的に受け入れられる同一ヴァルナ婚とアヌローマ婚に限ってその組合せと序列を示す。

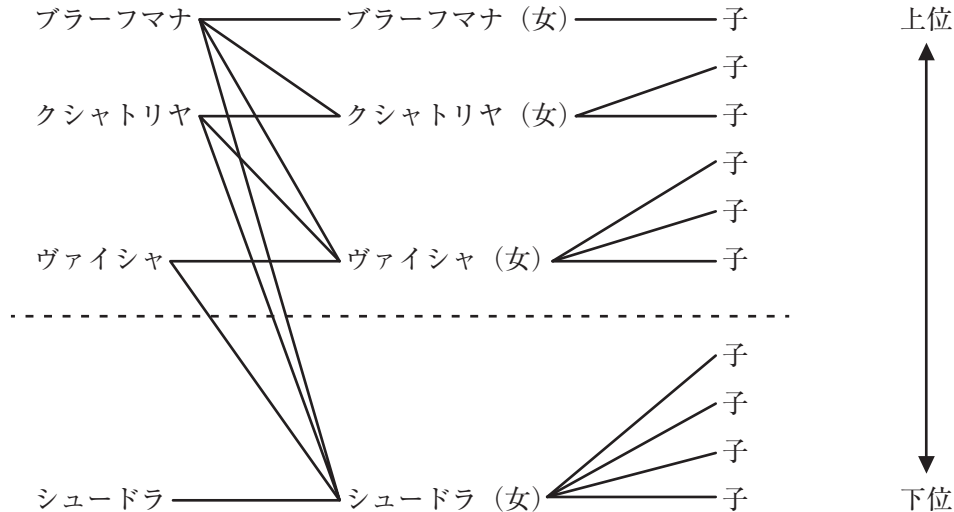


図2. 同一ヴァルナ婚とアヌローマ婚の組合せと序列

(3) 4 ヴァルナ以外の集団は実際にどのように組み合わせられたか (一部)

以下の表は、一部であるが、ダルマーストラおよびスメリティが4 ヴァルナ以外の集団に対して、どのような混血の組合せをしたかを示したものである。この中で Caṇḍāla についてはダルマ文献は一致して最下位の組み合わせを与えたことが注目される。

表2. ダルマーストラおよびスメリティにおける4 ヴァルナ以外の集団の混血の組合せ

	集 団	Baudh	Gaut	Vaś	Vaikh	Mn	Yāj	Nār	Kāt	Viṣ
ア ヌ ロ ー マ	Ambaṣṭha	B-V	K-V	B-V	B-V	B-V	B-V	B-V	—	—
	Niṣāda	B-S	B-V	B-S	—	B-S	B-S	—	B-S	—
	Pāraśava	B-S	B-S	B-S	B-S	B-S	B-S	B-S	B-S	K-S
	Ugra	K-S	V-S	K-S	K-S	K-S	K-S	—	K-S	—
ブ ラ テ ィ ロ ー マ	Sūta	K-B	K-B	K-B	K-B	K-B	K-B	—	K-B	—
	Vaidehaka	V-B	S-K	—	S-V	V-B	V-B	V-B	V-B	V-B
	Āyogava	V-K	S-V	—	V-K	S-V	S-V	S-V	S-V	S-V
	Māgadha	S-V	V-K	—	V-B	V-K	V-K	V-K	V-K	V-K
	Caṇḍāla	S-B	S-B	S-B	S-B	S-B	S-B	S-B	S-B	S-B

B:brāhmaṇa; K:kṣatriya; V:vaiśya; S:śūdra

2) 正業以外の職業に従事する者たちにどのように対応したか

— 窮迫時の生き方 (アーパッドダルマ) —

創造主は4 ヴァルナをそれぞれに特有の社会機能・正業を付して創造したというのが理念であるが、実際にはブラーフマナですら多様な職業に就いていたことが知られる。この社会機能・職業に関する理念と実際との間のギャップを埋めるのがアーパッドダルマ理論であった。この理論は、いかにしても定められた正業に就くことが出来ない場合は次位ヴァルナの職業に就いてよいとする。ブラーフマナの正

業はヴェーダの教授あるいは祭式の執行と定められたが、實際上、それ以外の職業に従事していた者たちが多くいたのであり、彼らは「窮迫時」(アーパッド) という理由でその職業を黙認されたであろう。ダルマ文献の編者たちは、正業に従事しない場合のペナルティあるいは従事してよい職業に一定の規制を設けることを通して理念の推進を図る一方において、アーパッドダルマ理論を構築し柔軟に現実に対応する装置を構築した。

表 3. 「窮迫時」(アーパッド) の理論

理念社会を守る	現実的対応
①とりわけ正業以外に従事するブラーフマナに対して厳しい禁止規定を設ける ⁷	苦境にあって正業に従事し得ないときは、次位ヴァルナの正業に就いてよい ¹⁵
②正業以外に従事するブラーフマナに対するペナルティを規程 薬屋・役者・踊りの師匠・航海に従事・それらと同等の職業に従事⇒パティタとする ⁸ 商人・職人・牛飼い・召使いに従事⇒シュードラと同等に扱うもしくはパティタとする ⁹	<ブラーフマナ> ¹⁶ ①すべての者に祭式を執り行い、ヴェーダを教授し、贈り物を受け取ってよい。 ②それが駄目ならクシャトリヤの職業についてよい。 ¹⁷ ③それが駄目なら、ヴァイシャの職業についてよい。
③その他ブラーフマナが扱ってはならない品物が規定される ¹⁰ ほか、いかに窮迫時とはいえ無節操に何でも扱えばパティタとする ¹¹	<クシャトリヤ> ¹⁸ ①ヴァイシャの仕事に従事してよい
④農業に従事するブラーフマナに対する種々の規制を設ける ¹²	
⑤一般則として上位ヴァルナの職業に従事することを禁止 ¹³	
⑥アーパッドダルマはあくまでも一時的措置であり、状況が変わったら正業に就くべきことを規程 ¹⁴	

3) 家住を拒否する出家主義者にどのように対応したか

ーアーシュラマ理論：禁欲出家主義との共存ー

(1) ダルマースートラの対応ー妥協

ダルマースートラは一貫して家住・家長主義を理念とする。パウダーヤナは供儀をせず、婚姻を結ばず、ヴェーダを無視し、ブラーフマナを無視する家は家でなくなることを特記し (1.10.26)、またヴァシシュタも家の滅亡は一切の滅亡に他ならないことを強調する (1.26-27;1.38)。

しかしこの強い警告の一方において禁欲出家主義に対しては柔軟な姿勢を取った。すなわち、学生期においてヴェーダと正統的価値観を学ぶことを義務付けたほかは、その後の生き方については自由選択とする現実妥協的な理論と装置を構築した。

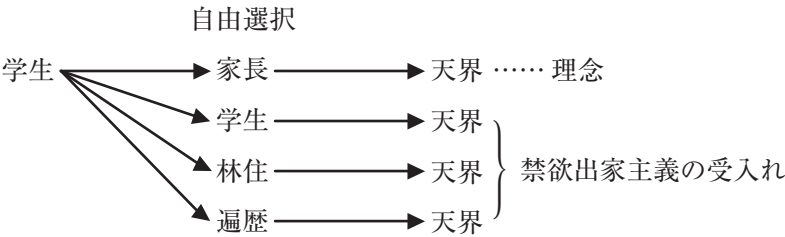


図 3. ダルマースートラにおける自由選択と禁欲出家主義の受入れ

(2) マヌスムリティの対応—妥協から理念の強化へ

ダルマーストラにおいては禁欲出家主義に対する妥協が主であったのに対して、マヌスムリティにおいては禁欲出家の価値観を受容する姿勢を示しながらも、実質的には、家住主義の正統的理念をむしろ強化する理論と装置を構築したことが注目される。

すなわち、ダルマーストラにおいては学生としてヴェーダと正統的価値観を学べばその後は家住を選ぶと禁欲出家を選ぶと自由選択としたのに対して、マヌは学生を終えた後は結婚して家長となることを義務付け、出家は子孫を残し髪に白髪が混じりだして後にのみ認めた (Mn6.2)。

マヌは以下の表 4 のように生き方を整理した。

表 4. マヌスムリティにおける家住主義の正統的理念の強化

幼児期	学生期	家住期 (家長)	老後期	死後
親から受ける 罪の除去 ・受胎式 ・誕生式 ・命名式 ・外出式 ・剃髪式	ヴェーダの中への誕生 ・ヴェーダの学習 ・ダルマの習得 ・祭火の世話 ・師への奉仕	結婚 子孫を残す ヴェーダ学習・教授 祭式儀礼 ダルマの実行	子孫を残し白髪が混じりだした後にいずれかを選択 ①家住を続ける ②林住 ③遍歴 ④林住→遊行	天界

4) 罪を犯す者・不浄なる者への対応

再編によって理念化された社会は浄の世界である。理念社会の行為規範 (ダルマ) を破って罪を犯す時、あるいは汚物に接触して汚染される時、人は不浄 (aśuci) となる。不浄はこの理念社会の外に排除されねばならなかった。しかし罪・不浄の存在は現実である。ダルマーストラはここでもこの不浄とされた人間を社会の外に排除するだけに終わらせない。排除という厳罰主義の一方において、罪の除去 (プラーヤシュチッタ) そして社会復帰という仕組みを装置として取り入れた。

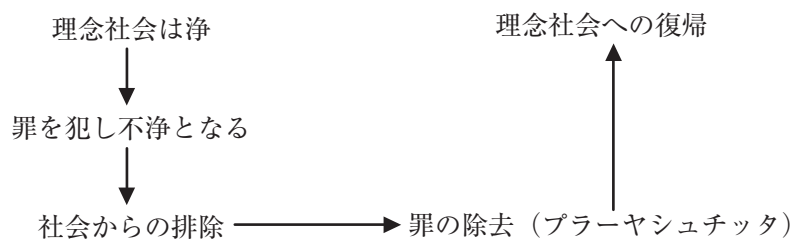


図 4. 罪の除去 (プラーヤシュチッタ) と社会復帰

5) 多様な慣習への対応

ダルマーストラの編者たちは、理念社会を推し進めるべく、すべての社会の構成員が模倣し準ずるべき行為規範 (ダルマ) を定め、人々にその順守を求める一方、多様な慣習に対しては、許容され得るものと許容され得ないものとを区別して柔軟に対応した。

この点で Āp は、正統な行為規範を定めることは困難であるという認識の上に立ち、書の末尾において注目すべき言葉を述べている。

- ・記憶によって伝えられてきたテキストによってダルマの完全を図ることは難しい (Āp2.29.13)
- ・それゆえにこそ、すべての地域 (janapada) において正しい教育を受け、齢を重ね、官官を制御し、貪欲を離れ、偽善なきアーリヤたちが一致して従っている生活に準じるべき (Āp2.29.13)
- ・ある者たちは女、すべてのヴァルナから残りのダルマを学ぶべしと言う (Āp2.29.15)

ここには、社会再編に乗り出したダルマーストラの時代、ダルマの書によって理念社会の正統的な行為規範を確定することの困難さと、その状況の中で、多様な慣習に柔軟に対応しようとしたことが窺える。

まとめ

紀元前 6 世紀前後頃、ヴェーダを価値観として学び、結婚して家庭を築き、子孫を残し、ヴェーダ祭式と家庭祭式を生活の中心に据え、死後の天界を得るという生活体系は、これをことごとく否定する禁欲出家主義の台頭によって脅かされた。このことによって当時人々の日常生活、日常行動の在り方を整備することを役割としていたダルマ文献の編者たちはそれまでの伝統社会の新たな再編を迫られることとなる。

彼らが拠り所としたのは、第一に、リグヴェーダに発しそれを発展させた創造主ブラフマンは 4 ヴァルナをそれぞれに特有の社会機能・正業を付して創造したという根本理念であり、そしてこの理念はヴェーダの中で宇宙秩序原理として展開されていたダルマの観念によって具体化、補強された。大自然を構成する太陽や月あるいは曙光、河川等々がそれぞれに特有のポジションと特有の機能、属性を有しておりかつ相互に不可侵であることに着目し、それを定めているのは宇宙秩序そのものであり、宇宙秩序からそれぞれに対して発せられるダルマに従っている結果であるとした。ダルマ文献の編者たちにとって、人間社会も宇宙秩序の一環である以上、同じダルマの下に定められているべきものであった。4 ヴァルナは太陽や月等と同じく人間社会秩序の中でそれぞれに特有の社会的ポジションと社会機能・正業を有しているべきでありかつ相互に不可侵であるべきであった。

しかし多様な社会の現実とは理念通りでないことは言うまでもない。ここでダルマ文献の編者たちは理念と現実との間の二重社会の現出に直面する。彼らにとっての課題は二つであった。すなわち、如何にして理念社会の実現を図るかであり、他の一つは現実との間のギャップに如何に対応するかであった。彼らはダルマ文献の編纂という形でこの両課題を解決するための理論と装置を構築したのである。

ここには、ダルマ文献の編者たちにとって、ブラフマニズム社会の再編は単に理想社会を理念化することを意味してはいなかった。実際的なものであった。この意味において理念化の一方において理念と異なるものに対して現実的な対応をする必要があった。そして彼らの採った姿勢は、異なるものを無視したり、また力による最初からの完全な同化を求めず、異なるもののあり方（本質）を安堵しつつ、漸進的な統合・同化を目指すことであった。そしてこのための理論と装置が構築されていく。＜妥協からとり込みへ＞これが多様な現実を理念社会の中に統合化していく基本姿勢であったと言うことができる。

* 本稿は以下に基づいている。

渡瀬信之「ブラフマニズム社会の形成—Dharmasūtra において見られるヴァルナ体制の思想」『文明』1987, pp.5-

- 同「法典の成立とその思想」『岩波講座東洋思想 5 インド思想 1』1988、pp.112-134
 同「Dharmasūtra において見出される Āśrama 観」東海大文学部紀要 36、1982、pp.5-22
 同「ヴェーダ＝ダルマ世界における罪と浄不浄」『インド思想史研究』1995、pp.51-71
 同「dharma の成立—dharmajña-samaya—」『印度学仏教学研究』1978、pp.82-86
 同「Dharma の確立—Āpastamba-dharmasūtra における dharmajña の役割」『東海大学文学部紀要』1980、pp.1-12

略号

Āp: Āpastamba Dharmasūtra

Baudh: Baudhāyana Dharmasūtra

Gaut: Gautama Dharmasūtra

Kāt: Kātyāyana Smṛti

Mn: Manu Smṛiti

Nār: Nārada Smṛti

Vaikh: Vaikhāṇasa Dharmasūtra

Vaś: Vaśiṣṭha Dharmasūtra

Viṣ: Viṣṇu Smṛti

Yāj: Yājñavalkya Smṛti

- 1 Cf. J.Gonda, Die Religionen Indiens, I, Stuttgart 1960, pp.283-288; A.L.Basham, The wonder that was India, New York 1959, pp.243-246
- 2 Vājasaneyā Samhitā 31.11; Taittirīya Samhitā 7.1.1.4-6; PB6.1.6-11
- 3 Baudh1.18.2-6; Gaut4.24; also Vaś4.3; Āp2.10.4-7
- 4 婚姻条件については、cf. Gaut4.1-5; Vaś8.1-2; Āp2.13.1; Baudh2.16.3
- 5 種々のレベルでの混血については、例えば Baudh1, 16, 9-12; 1, 17, 9-14; also Mn10, 5-39
- 6 アヌローマ婚でもシュードラとの婚姻については意見が分かれたが、基本的には一致して排除しようとした。
Vaś1.25-27; Gaut4.26; Baudh2.2.7-8, 11
- 7 Baudh1.10.27; 1.10.28-29
- 8 Baudh2.2.13-14; 2.2.2
- 9 Baudh1.10.24; 2.2.5; 2.2.13-14
- 10 Baudh2.2.27; Vaś2.27-30
- 11 Baudh2.2.5
- 12 Baudh2.4.20-21; Vaś2.31-36
- 13 Vaś2.22
- 14 Āp1.18.7-8; 1.21.3-4
- 15 Vaś2.22
- 16 Gaut7.5-7
- 17 但し Baudh2.4.16-17 は、ブラーフマナの場合クシャトリヤの職業は残酷であるという理由でヴァイシャの職業に就くのがよいとする。
- 18 Gaut7.26

RINDAS 伝統思想シリーズは、人間文化研究機構現代インド地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構（NIHU）<http://www.nihu.jp/sougou/areastudies/index.html>

NIHU プログラム現代インド地域研究（INDAS）<http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

龍谷大学現代インド研究センター（RINDAS）<http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

RINDAS 伝統思想シリーズ 8

ブラフマニズム社会の再編

——理念社会の形成と多様社会への対応・共生から統合のための装置——

渡瀬 信之

2012 年 3 月 1 日発行 非売品

発行 龍谷大学現代インド研究センター

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1

龍谷大学白亜館 3 階

TEL：075-343-3809 FAX：075-343-3810

<http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

印刷 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麴屋町東入石不動之町 677-2

TEL：075-343-0006

ISBN 978-4-904945-12-4

ISBN 978-4-904945-12-4

